令和元年度研修員　森田菜摘さんの声

プロフィール

大学を卒業後、フランスの大学院にて人権・人道支援の修士号を取得。大学院在学中に、UNRWA ベイルートフィールド事務所にてプログラムサポートインターンとして従事。大学院卒業後は、外務省国際協力局緊急・人道支援課にて経済協力専門員として勤務。その後、エジプト・カイロの聖アンドリュー難民サービスにて難民認定分野にてボランティアのリーガルアドバイザーとして勤務。平和構築人材育成事業研修員として UNHCR パキスタン事務所へ派遣され、ジェンダーに基づく暴力の保護担当官補として働く。現在も同事務所で引き続き勤務している。

１．平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

高校の国際関係の授業を通して中東で起きている紛争について興味を持つようになりました。紛争による母国での戦禍を逃れ難民となっている人、生活苦で働かなくてはならず学校にいけない子供たちなど、日本に生まれた自分にはとても想像できない生活をしている人がいることを学び、将来は何か人道分野で貢献することは出来ないかと漠然と考えたことが、この分野を目指すことになったきっかけです。

大学時代から本格的に国際機関で働く道を意識し、どうしたら国連に入ることができるのか調べる過程で本事業のことを知りました。それ以来、ぜひ応募要件を満たした際には挑戦したいと考えていました。国連機関で 1 年間の実務経験を得られるのは貴重な経験であり、また、その後のキャリアに有利に働くと考えたため応募をしました。

２．国内研修に参加した感想は？

人道支援・平和構築の分野のプロフェッショナルによる講義、外国人研修員と日本人研修員混合のグループワーク、安全管理実践トレーニング、キャリア個別支援などが詰まった 5 週間は非常に充実しており多くの学びがありました。講師の方々には、海外派遣中にも大変お世話になり、サポートしていただきました。また、国内研修では主に国連機関でのキャリアを目指す仲間と共に、約 5 週間合宿形式で過ごしました。大学院を出てからは、同じ分野を志す人と繋がり、まとまった時間を共に過ごすことはほとんどなかったため、この研修を通して他の研修員と知り合えたことはとても貴重でした。

３．業務内容について教えてください。

私が業務を開始したのは 2020 年 4 月末で、ちょうど新型コロナウイルスの大流行により、派遣国のパキスタンでもコロナ禍によるロックダウンやステイホームにより難民の生活が困窮している時期でした。派遣先の UNHCR パキスタン事務所のプロテクションユニット

では、緊急現金給付支援が主なプロジェクトとして動いており、私もすぐに支援業務に従事しました。

私が担当した主な作業は、支援を受ける難民がUNHCRの定める脆弱性の基準を満たしているか否かの確認作業です。私は、約13人のナショナルスタッフ向けにそれぞれがコンタクトすべき難民の電話番号リストを作成し、家族や子供の人数、収入額等の社会経済状況を電話インタビューしてもらい、その情報をもとに脆弱性の基準を満たしているかどうか精査しました。エクセルを使って行う地味な非常に時間のかかる作業ですが、難民の社会経済状況を理解するのに非常に役立ちました。

緊急現金給付支援の業務が落ち着いてからは、本来のジェンダーに基づく暴力（GBV）関連業務に取り組みました。GBV担当者としての仕事は多岐に渡りますが、主にGBVサバイバーの難民認定業務、GBVサバイバーに対するケースマネージメント支援、GBVのリスク削減メインストリーミング、GBV防止の啓発活動、GBVの標準業務手順書（SOP）の作成等があります。

４．海外派遣での感想は？一番印象に残っていることは？

主に印象に残っていることは、やはりコロナ禍で海外派遣を行ったことです。派遣中は終始自宅勤務で、オフィスにいく機会はほとんどありませんでした。派遣の最初の3ヶ月は日本の自宅から勤務をし、その後はパキスタンに渡航してイスラマバードのアパートから勤務をしました。仕事ではマイクロソフトのTeamsを使いますが、インターネット環境が悪く、カメラをオンにして話すことは出来ないため、音声のみでの会話が主流でした。しかし、これが個人的には非常に辛かったです。音声の聴力のみで全てを理解することは（音はクリアではなくてよく途切れたり割れたりする）容易ではなく、Teamsでチームの人と関係を深めるのは、正直時間もかかり、様々なフラストレーションも溜まりました。それでも、自宅勤務でできることは何かを考え、そこに重点をおくように思考を切り替えてからは精神的にも楽になり、仕事にもポジティブマインドで取り組めるようになりました。

また、コロナ禍のためフィールドに行く機会は多くはありませんでしたが、難民の方と対面で話せた時のことはとても強く印象に残っています。生計プロジェクトの立ち上げの事前視察において、アフガン難民の少女たちと対面で話す機会があった際、将来何になりたいか聞いたところ、数人の少女たちは自分が目指している職業や夢について話してくれましたが、一度も自分の夢や将来について考えたことがないからわからないという回答が数名からありました。そのような回答の背景には、多くの理由があり一括りに説明はできませんが、生の声は非常に衝撃的でとても重く、多くのことを考えさせられました。

また、ジェンダー平等やGBV防止の啓発活動は私が主体的に取り組んだ仕事で印象に残っているものの一つです。3月8日の国際女性デーでは、コロナ禍におけるメンタルヘルス

の重要性や女性の教育や参画の必要性に焦点をあてたイベントの企画・運営を行いました。イベントは Webex を通じて配信し、一部のゲストスピーカーはホテルに集合し顔を合わせることができました。イベントには、UNHCR 職員、ドナー、一般からの合計約 40 名がオンラインで参加し、UNHCR のパキスタン親善大使のマヒラ・カーン氏にもオンラインで参加してもらうことができました。コロナ禍で対面のイベント開催が難しい中、少人数ながらも実際に一部対面のイベントを開催することが叶い、ジェンダー問題の意識を高めるだけではなく、ジェンダー平等や女性の教育等の推進に積極的に声をあげる難民やコミュニティリーダーとの関係強化に貢献することができました。

（国際女性デーにおいて、アフガンコミュニティリーダーが女性の教育や女性の参画を促すスピーチを行っている様子。筆者は一番左。）

5．今後のキャリア・プランを教えてください。

本事業の修了後は、UNHCR パキスタン事務所に契約を延長していただき同ポストで働いています。今後は、人道支援や人権分野のポストがある国際機関での P レベルのポスト獲得を目指しています。JPO プログラムへの応募、空席公募等の様々な方法を通じて国連機関での勤務を継続していきたいと考えています。

6．事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

国連機関で働いてみたいと考えている方、少しでも興味のある方は、まずは応募することをお勧めいたします。まだコロナ禍で大変な時期ではありますが、海外派遣中のサポート体制も非常に充実しています。国内・海外派遣中に経験したことは、今後のキャリアを大きく変えてくれます。ぜひ積極的にチャレンジしてみてください。